

野 菊

備中 大西 松 月

汝が露に宿る鈴蟲がうへも、打群て遊ぶあきつもの、恨みも忘れて、手折り踏みし床の上の野菊よ。嗚や桔梗丹草の友慕はしう、將故里の野や戀しう偲びてやあらんを。罪深き妾に摘まれて、恨む色さへ薄紫の香に匂へる風情よ。飽かぬ眺めのこよなう哀れ深うて、繪筆とる身にしあらば都の友へ寄する葉書にあゝ寫しても見んものを……。

繪 端 書

岩代 服部 貞子

散歩はすれど、田の畔の連華草圍むは二つの足、二もとの莖取りて、二つ並べる、机上に差せど、右なる座薄團は、いつも冷やかなり。あゝ兄上は今頃如何にと思ふ折から、郵便！とる手おそしと見れば、オ、それよ、戦地よりの繪端書——勇ましう肥えたる馬のひつめのもとにやさしの莖の——にたゞ五文字「また咲き候」と。

蝶々の墓

岩代 服部 貞子

水入ににほふ、莖の香慕ひて、まよひ入りしは汝が運命。アルコールの香り高さ、理科室の机上にあはれ早速の犠牲、無残やその双羽はもぎ取られて……夕日なゝめなる、校舎の裏の、若草もゆるるところに、そが遺骸は埋められつ。かの莖手向けて、かの水そゝぎて、さて水莖のあとうるはしく……「嗚呼蝶々の墓」……。

(評) 無邪氣なるこの心、知らず、今幾年の後まで、もてるものによ。

女

尾道 橋本 東洋子

此所を何所とも知らず、我を誰とも知らず、血しほしたゝる劔を振りて、將に斬壕に跳り入らんとせし刹那、敵弾胸にアツと眼開けば、有明の燈ほのくらくして板戸打つ霞の音一しきりはげしう……かくて我は女にてありし。

わが理想の夫

二十世紀女學生

財産の豊富、容貌の秀麗亦共に喜ぶべしと雖、此等は敢へて、我れのえならぶ處にあらず、想ふに、才學世に超えて、識見自ら高く、常に奮進的氣性に富みて剛毅磊落恰も彼の松柏が霜雪を冒し凛然高き天に沖して屹立せるが如き概あり、而してなほ一點葉末に結ぶ露の玉優しき情のやどるあらば、是即ちわが理想の夫たる也。

(評) 筋は憐れなれども、酔未だ感を惹くに致らず。

鐘の音

長崎 高比良きぬ子

自分は、今日も小さい弟を抱いて、腰掛松をたづねた。根本に打ちよする波の花に、弟が小さい手を舉げて、よろこんで居つた。晚鴉が権現の森にひれ入つた時、玉臺寺の夕鐘が長く、餘韻をひいたので、思はず身をふるはせてひしとばかりに抱きしめたのであつた。……

(評) ホステリ癖的傾向あり自愛せられよ

落花

秋田 庄司きん子

うち仰げば繪の具のどりくとき流せる、草に舞ひおつるはまことこれ落花、數千の粹人、高き香にあこがる、さむれば同じ夢なるを、知らてかいなか、此の大教訓を、肩、頭のきらひなく、いたゞきて讚ふ醉人。

(評) 生意氣な事、言ふべからず。

静ちゃんの汽車

岩代 服部貞子

「これは静夫が書てすよ」との姉さんからの繪葉書と一緒に着いた女學世界、見ると口繪の裏に墨黒々と横はる曲線圓形、オ、これは汽車である。あ、この汽車、ゆがんで居るこの汽車、よしや私のこの身体は乗せてゆかれずとも、私のこの静ちゃんに、あいたい、だつこしてやりたいと云ふこの思は乗せてゆかれるてありませう……。

(評) つくり過ぎたり。

墳墓

神戸 鈴木まさ子

沈み果た夕陽は、淡く山際をそめて、星かげ一つ二つと見ゆる夕暮、新らしき卒塔婆の前に、愛らしき少女子、菫花の花束を手向て、「姉さん、文子ですよ、姉さんは菫花がすさだつたから、——」と後は言ひ得ず、泣き伏した。

月は紫だちたる雲の間よりおぼろに出で、美しき振分髪は風に亂れ、白きリボンは、恰も胡蝶の様に……